垂水史談会報

第 49 号
2023（令和５）年
３月発行

【報告】

第二回「垂水のうたびと」展 ―市立図書館―

和田秀豊（和歌）と宮田秀子（俳句）

第二回「垂水のうたびと」展は、令和四年十二月中に、和田秀豊（和歌）と宮田秀子（俳句）の両氏の作品を展示・紹介。

洋画家・和田英作の父である和田秀豊氏は、幕末の安政元（一八五四）年に垂水で生まれました。西南戦争後、東京にでた秀豊氏は内村鑑三や新島襄らとキリスト教布教に携わりますが、その傍らハンセン病の園長や盲学校の校長など、社会福祉事業に生涯を捧げました。

また藩制時代に始まる和歌の伝統を受け継ぎ、多くの和歌を遺しています。昭和二十一年死去。九十二歳。作品に「年老いて頭の雪となるままに嬉しきことも積もりけるかな」「世の人の為にその身は火に溶けて闇を照らすぞたふとかりける」ほか。

宮田秀子氏は大正十一（一九二二）年台湾に生まれ、教員の夫とともに戦後、水之上に引き揚げました。夫の転勤に伴い肝属郡内を転居。六十歳以降、華道や茶道を究める一方、南日俳壇年度賞など俳句受賞歴も多く、垂水市文化協会役員を歴任して、協会歌の作詞も手がけています。

作品に「茘枝うまし薩摩女子になりきりて」「糸瓜煮て夫婦いさかふ事もなし」ほか。

―たるみず春秋―

交差点の真中に御慶交しけり

伊地知いつ子

正月の年始回りは一家の主人が、家々を回って正月の挨拶を交わし合うものであったが、今は様変わりした。コロナの時代にあっては猶のこと、訪問し合うことは皆無と言っていい。しかし、新年が明けためでたさはやはり残っていることも確か。

この作品は、現代の街中での正月の一点景である。

【研究ノート】

（文章：瀬角龍平）

郷土芸能「八丁杵（はっちょぎね）」について

元下原田八丁杵保存会　西田和則

『文化たるみず』第十三号（平成元年）に寄稿したものに、今回、歌詞を補って掲載するものです。

一、　踊りの由来

八丁杵が始めて踊られたのは、今から３３０余年も前のことで、垂水第七代領主島津久治公の時代（一六四七～一六九二）であったと伝えられている。

ことの起こりは、垂水郷の田神村等において大規模な新田開発（よめじょ川疎水開田）が実施され、その際、水神祭の余興として誕生したものがこの踊りであるといわれる。

江戸時代の享保から慶応を経て、明治、大正、昭和へと集落内に祝い、祭事があるたびに当時の若者達によって踊り続けられてきていたが、昭和三十四（一九五九）年、垂水小学校創立九〇周年記念事業での踊りを最後に後継者不足のため途絶えてしまっていた。

ところが、「県内でもこの種の踊りは他に保存がされておらず、とても珍しく貴重なものでありぜひ復活を」と市文化財保護審議委員会委員の助言もあって、昭和五十一（一九七六）年、下原田自治公民館新築落成祝賀記念にと十七年ぶりに復活したものである。

復活に当たっては、経験者や古老が中心となり、師匠格に故斉野佐太郎氏（昭和六十三年亡）指導の下に、壮年男子十二名が毎夜練習習得して踊った。その姿は勇壮で気合のかかったものである。

踊り手は、想像以上に体力を消耗して体調を崩す者も時にいるが、このすばらしい郷土芸能を正確に体得、伝統を継承し後世に伝承していかねばなりません。

二、歌詞

1. 踊いやそけ来た、宿どけ取ろか
　宿は篠田の森の下「ア、ヨイサーヨイサー」
2. でけたでけたよ稲穂がでけた
　原田たんぼに黄金の波よ「はやしくり返し」
3. 今年しゃ豊年、稲に穂が咲いた
　道の子草も米がなる　「はやしくり返し」
4. ヤッサ節なら、尻ゆ高こつぶれ
　前の牟田田が腰かかる　「はやしくり返し」
5. ここの座敷は、祝いな座敷
　鶴と亀とが舞い遊ぶ　「はやしくり返し」

6．　ここの座敷は、祝いな座敷
　　枝も栄える、葉も茂る　「はやしくり返し」
7．　私しゃ鹿児島、納屋馬場育ち
　　米の生る木はまだ知らぬ　「はやしくり返し」
8．　米の生る木を、知らんつがあいや
　　原田田んぼに来てみやれ　「はやしくり返し」

《　9～16番は資料が無く不明　》

港部落（集落）の「かっうつ（垣っ打っ）」

西田和則

『広報たるみず』令和五（二〇二三）年二月号に柊原地区の「かべうっくじい」の記事が掲載されておりましたが、私の生れ育った浜平の港部落（集落）にも子どもの行事の「かっうつ（垣っ打っ）」がありました。そのことを思い出しながら記してみます。　（昭和２０年～３１年ごろのことです。）

① と　き・・・旧暦一月十四日
② じかん・・・夕方頃から開始。
③ ところ・・・新婚一年目部落（集落）内の夫婦宅。
④ 参加方法・・・保護者等に教えられた夫婦宅に、小・中学生等が各自で集合し参加する。
⑤ 垣・・・１０㌢位の丸太、又はダング（乱杭）等を自宅の庭に２本、参加者が多いときは垣を延ばして３本を打ち込み（支柱を取り付ける垣もあり）丸太、柱等の直径約半分位ある横棒を用意し、しっかりとカッネンカズラ（葛カズラ）で入念に縛り付けてある。
⑥ はーめぼ（はらめ棒）・・・１㍍位の白木（木の種類は問わない）を準備し、手元は握りやすく力が入れやすいように細目に丸くし、半分から先は四角に削ってカズラが切れやすいように加工し、その一つの面には保護者や子供が筆等で「新玉（あらたま）の年の初めに棒を取りて万（よろず）の宝吾ぞ打ち取る」と書き込み、また、裏面には旧暦の一月十四日と書き入れる。そして、この棒を使用してことにあたる。
⑦ 「かっうっ」の始まり・・・参加者が一斉に「ヨメジョをダッシャイ、かくダッシャイ（嫁を出しなさい、垣を出しなさい）」と大声で発声し「はーめぼ」で若夫婦が設置した垣を打ち壊しにかかる。
⑧ 終了・・・打ち壊しが無事済むと、若夫婦や家族が外に出てきて、事前に準備している、半紙に包んだお菓子や暖かい飲み物等を配布したり、労いの声掛けをしたりして接する。また、他には参加者の保護者等と宴席を設けて一献の座を設け祝っているところもあったとのこと。

以上のことについて、次の方々に対面して話を伺いました。

・前田　勉さん　八十六歳
・中島　努さん　七十六歳
・渡辺義昭さん　七十三歳

【三氏からの聞き取り状況】
〔2023゛2゛21　録音あり〕

―　三者に接して感じたこと　―

古いことであり、記憶が薄れてお互いに微妙な相違はあるものの、話し込むうちにそれぞれ同調されるところをまとめたところです。

【垂水市史料集（一）】より

西南之役　私学校生徒の従軍譚　⑤

―立山健氏への聞き書き―　（山口栄之　筆記）

山鹿滞陣の事

山鹿滞陣中は悠々湯治などしていて、たまたま味方に弱みのある処があれば、それの援助に行ったりして日を暮らしていた。（本城の大窪平七氏殿は他の隊であったろうけれども、その隊も同じく滞陣しておったろう。すなわち同人の談、左のとおり。

「自分は当時十八歳で、身体強健な方であったから、余り疲労困憊などもなく、また一度も病気をせず負傷もせずといった塩梅で、処々に転戦していたが、山鹿滞陣中に面白いことに出会った。否、自分には関係なくただ見物したのである。一日、湯治に行った帰りがけに、池辺隊の宿所の前を通ると、喧嘩口論の声がするので、ちょっと立ち止まって耳を傾けた。すると忽ち、「表へ出ろ」という声がして、同時にドヤ〳〵と人々が出てきた。その傍らから一人の男が、「そのままの構えを崩してはならぬぞ」と言いつつ、介添えをしているのであった。やがて道路上に各々の足場が定まると、ヨシ、と言って介添え人が身を引いた。一方は三十歳近い色の浅黒い中背のガッチリした男、一方は二十一、二歳の色の白い美男子である。年上の方がまず組み合った刀をスッと引きはずして後ろへ飛び離れると、年下の方は一歩踏み出した。と見ると

【牛根二川の招魂墓】

互いの白刃が空に閃き、日光を反射し火花が散るように見えたが、すぐまた双方とも跳び下がった。そしたら年下の方は小鬢と肩の辺りから血が流れ、年上の方は拳に血が出てきた。さらに双方いずれも中段の構えで、ジリジリと足の拇指で歩み寄って行く。この時、見物人も沢山集まっていた。誰もみな若い方に力を入れていたか知れぬが、どうしても年上の方が強そうであった。エ―ッと一声、年上の方が刀を引くようにして後ろへ跳び退いた。年下の方は前へのめるように打ち倒れた。即ち勝負は終わったのである。然るに、年上の方も流石に疲れたと見え、刀を杖づいて肩息荒く吐いていた。すると、「兄貴の仇」と呼びかけて十七、八歳の少年が真っ向から斬りかかった。ハッとしたように身を沈めて横に払った。此方は確かに手応えがあり、少年の方は空を斬って「無念」と一声。脇から噴出す血を

左手に押えながら、兄の屍の上に打ち倒れて死んだ。」）

（―以下次号―）